鄭大均

（財）韓哲文化財団評議員
首都大学東京人文科学研究科教授

てい・たいきん◎1948年、岩手県黒沢尻町（現北上市）生まれ。立教大学文学部と法学部、カリフォルニア大学ロサンゼルス校で学ぶ。81～95年まで韓国の慶南大学、東亜大学、啓明大学で教鞭をとる。95年より東京都立大学（現首都大学東京）人文学部助教授、99年同教授に就任。渡韓前に在日論を書き始めていたが、韓国時代に日本人と韓国人のながめ合いを研究テーマとするようになり、日本に帰国した90年代後半から再び在日論にも取り組む。著書に『増補版　韓国のイメージ』『日本（イルボン）のイメージ』『在日の耐えられない軽さ』（いずれも中公新書）、『在日韓国人の終焉』『在日・強制連行の神話』（共に文春新書）、『韓国のナショナリズム』（岩波現代文庫）、『姜尚中を批判する』（飛鳥新社）など多数。

日韓のながめ合いを考える
友好と葛藤の狭間で

長い歴史の関わりの中で、韓国と日本は互いの姿を映し出す鏡のような存在であった。そこには実像も虚像も、光も影もある。このながめ合いを有意義なものに高めたい。そんな願いを込め、日韓関係史や在日について詳しい鄭大均氏と、韓国の民衆文化に造詣の深い川村湊氏に対談をお願いした。

撮影＝岩橋 昇／構成・文＝大田由紀江

80年代の第1次韓国ブームを振り返ると

鄭　川村さんとのおつきあいは30年ほどになりますが、最近はゆっくりお話しする機会がありません。『韓国という鏡　戦後世代の見た隣国』（東洋書院）という本を編著で出したのは、もう25年も前のこと

川村湊

（財）韓哲文化財団評議員
法政大学国際文化学部教授・文芸評論家

かわむら・みなと◎1951年、北海道網走市生まれ。法政大学法学部政治学科卒。80年『異様なるものをめぐって――徒然草論』で群像新人文学賞を受賞。82年、鄭大均氏の紹介で、韓国の東亜大学校で日本語教師となる。85年関東学院大学女子短期大学文学部非常勤講師。90年法政大学第一教養学部助教授。2000年同大学国際文化学部教授。日本の古典から現代文学、韓国および東アジアの文芸、民俗学、映画など幅広いジャンルで評論家として活躍。主な著書に『妓生「もの言う花」の文化誌』（作品社）、『異郷の昭和文学』（岩波新書）、『温泉文化論』（新潮新書）、『ソウル都市物語』（平凡社新書）、『アリラン坂のシネマ通り　韓国映画史を歩く』（集英社）、『原発と原爆　「核」の戦後精神史』（河出書房新社）など多数。

ですね。

川村　二人とも釜山（プサン）にある東亜大学校の日本語教師をしていたご縁でした。鄭さんのほうが渡韓は1年早く、81年でしたね。

鄭　ええ。アメリカ留学から東京に戻り、英語学校で教えながら在日論を書き始めていた頃に、韓国人の友人から韓国の大学で日本語を教えてみないかという誘いをいただきました。韓国は父の国だし、韓国について無知なまま在日論を書くことにも不安があった。どこかもう一つの国を経験したくてうずうずしてもいました。まだ独身で、人生をやり直すにはちょうどよい時期でした。

最初に、馬山（マサン）の慶南（キョンナン）大学に1年。それから釜山の東亜大に移り、その後、大邱（テグ）の啓明（ケミョン）大学と、合わせて14年ほどを韓国の南部、慶尚道（キョンサンド）で過ごしたことになります。その間結婚し、子供も生まれました。家内は今ソウルの大学で教えていますから、今も日韓を往来する暮らしが続いています。

川村　私は日本語教師の話を、共通の友人だった在日の哲学者、竹田青嗣（たけだせいじ）から聞きました。新宿のホテルで3人で会ったんじゃないかな。当時『異様（ことよう）なるものをめぐって――徒然草論』で群像新人賞をとり、

さあ筆一本でやっていこうと業界誌を辞めたものの、まるで原稿の注文がこない。失業状態だったのですぐに飛びつき、家内と幼い息子2人をつれて釜山に渡りました。最初の滞在は4年半ほどです。

鄭　『韓国という鏡』が出たのは、ちょうど第1次韓国ブームの頃です。88年のソウルオリンピック開催が決まったのは81年の暮れ。それから何年かの準備期間をへて日本の商業ジャーナリズムが作りだしたのが80年代の韓国ブームですね。84年に関川夏央『ソウルの練習問題』が刊行されていますが、これを皮切りに、85年に『平凡パンチ』が韓国特集を組み、JTBの『旅』、平凡社の『太陽』、別冊宝島の『朝鮮・韓国を知る本』と雑誌が続きました。

川村　それまではエキスパートと称する研究家たちの、政治的な言論が中心でしたからね。朴正熙軍事独裁、民主学生運動、抵抗の詩人金芝河…。それが一転、感じる韓国。いろいろな外国の一つとして面白いと捉える、いい意味でのアマチュアリズムが新鮮でした。黒田勝弘、長谷川慶太郎、小室直樹、金元祚などの作品は影響力がありましたし、雑誌『現代コリア』にも韓国現代文化論がずいぶん掲載されました。まあ、拉致問題以降、すっかりスタンスが変わってしまいましたが。

鄭　60年代から80年代初めにかけての日本人の関心が、韓国の政治的否定性に対する政治的関心であったとしたら、韓国ブームの時代に特徴的だったのは文化的にながめるという態度で、それは今でも生きている。韓国の専門家というより、他分野からひょいと参入してきた人が面白い作品を書いたんですね。鳥羽欽一郎の『もう一つの韓国』（76年）、岡崎久彦の『隣の国で考えたこと』（77年）、上坂冬子の『慶州ナザレ園』（82年）などがそれで、そのあとに『ソウルの練習問題』が出てくる。

川村　文学も大きく動いたんですよ。私に即していえば芥川賞作家、中上健次の影響が大きかった。81年に1年間ソウルに暮らし、のちに『輪舞するソウル』や『物語ソウル』を著しますが、彼一流の感受性で、政治の左右を超えた、民族の根源的なバイタリティを探り当てています。土着といえば土着的。

自分のルーツを求め、梨花女子大に留学していた李良枝を日本の文壇に紹介したのも彼です。「面白い体験しているから、何か書かせてみたら」って。『群像』の編集者で今は作家となった辻章とひき会わせた。そこで生まれたのが処女作の『ナビ・タリョン』。

蝶々の打鈴（身の上話）という意味ですね。彼女は、韓国の巫俗舞踊も学んでいたからか、舞うようにあやうい精神の遍歴があります。89年、芥川賞をとった『由熙』ではそれを昇華させ、韓国・在日の問題を新しい形で再提起しました。

鄭　彼女は早世しましたね。37歳。

川村　はい。話は戻りますが『韓国という鏡』では「感じる韓国」だけではなく、「考える韓国」を打ち出そうと努めましたね。見る・食べる・楽しむ、ポップカルチャーでは語れないものを伝えたい。その指針となったのが田中明と長璋吉です。それぞれ75年の『ソウル実感録』、73年の『私の朝鮮語小辞典 ソウル遊学記』があります。体験記でありながら、ちゃんと深く考えている。その先達の驥尾に付したいと努めた。

鄭　田中明には巻頭の鼎談に登場してもらいました。愛知の出身ですが、叔父のいる京城（ソウル）に養子に出されて小中学校を朝鮮で過ごした。日野啓三や五木寛之みたいに幼少期を植民者で過ごした人です。田中さんの真価に気がついたのは韓国に行って、その地で暮らすようになってからのことです。韓国に対して安易に謝罪する態度は、実は韓国人の尊厳

に資するものではないということを学んだのは田中さんを通してです。

川村　長璋吉は69年、28歳のときに延世大学大学院国語国文学科碩士（修士）課程に韓国語を学ぶため、貧乏留学した人です。下宿のおばさんにつけられたあだ名が洋鼻さん。ソウルの街をすみずみまでさすらい、生地そのままの人間たちとの出会いを重ねる。彼は「人間の質の露天掘り」と書いていますが、韓国でも南朝鮮でもない、〝サラム（人）の国〟が活写されています。

鄭　韓国で暮らし始めると、韓国人が日本に対して何を考えているのかとか、われわれ自身が韓国人と、どのように向き合ったらいいのかが気になる。しかし、政治的関心の時代にそういうテーマで書かれた本はめったになかった。長さんや田中さんの本はその例外だったんですね。『韓国という鏡』では、川村さんが「韓国イデオロギー論」を書き、私は「〈日本語〉の国語化と禁忌語化」という論文を書いた。今、救う会の会長をやっている西岡力さんが「戦後韓国知識人の日本認識」という論文を書き、川村亜子さんは「ある韓国女性の身世打鈴」という論文を書いた。印象に残る仕事です。

川村さんは当時からずいぶんとフィールドに出かけてましたね。

韓国での生活から生まれた、それぞれのテーマ

川村　せっかくのチャンスですから。文学では親日文学、植民地文学ですね、まだほとんど研究されていなかったので、調べ始めたんです。それから民俗学。啓明大にいた韓国シャーマニズムの泰斗、崔吉城先生（広島大学名誉教授）の下で勉強グループを作り、よく現場に連れて行ってもらいました。韓国では職業シャーマンである巫堂が、家庭内の慶弔である出産、結婚、病気、葬儀、先祖供養から、共同体の祭りまで、さまざまなクッ（巫儀）を行ってい

ます。有名な巫堂ファミリーの長、金石出とも知り合い、旅から旅の暮らしについて歩きました。

お祭りで大きなものには江原道江陵の端午祭り。クッの他に、仮面劇や相撲大会、サーカス、お化け屋敷まで興行がかかり、露店や屋台がぎっしり並ぶ。猥雑で庶民的活気にあふれています。古典小説『春香伝』のヒロインをまつる全羅道南原の春香祭も有名ですね。海辺の村では海難者を弔うクッがよく見られます。

鄭　川村さんに比べると、私には韓国に対する好奇心が欠けていた。日本語教師として韓国に来たけど、韓国について学びたいと思うことがあまりない。川村さんがいろんなことに関心を寄せるのが不思議に見えた。伝統芸能なんてなにが面白いんだと。

川村　パンソリ、仮面劇、男寺堂（旅芸人集団）やその流れを汲むサムルノリ、コクトゥカクシノルム（人形劇）。これら庶民芸能の担い手だったのは、広大と呼ばれる被差別の下層民です。支配層の両班階層からは白眼視され、弾圧を受けることもありました。一般からも通婚を忌避されるなど差別されたという。日本の歌舞伎役者が、河原乞食と賤視されたのと共通するものでしょう。

「民衆の恨」ということで、民主派の学生や知識人にも注目する人がおり、保存や復興運動も盛んでした。本当に愛好しているのか、思想的に利用しているのか、疑問に思うこともありましたが。

鄭　国際交流基金の招聘で、日本でも国立劇場で上演されたことがある。韓国のものをけなしてはいけないという気遣いからか、褒め殺しみたいな評論もあった。

川村　韓国には両班的、儒教的、父系的な表層文化と、巫堂的、賤民的、母系的な深層文化の二つがあります。それが国旗である太極旗の模様のように、卍巴とからみあって、一つの円をなしている。民衆を理解する上で、欠かせない視点です。

鄭　映画もよく観ていまし

たね。

川村　韓国語の勉強も兼ね、早朝割引2本立て500ウォンという二流館に通っていましたよ。学生に、インテリは韓国映画は観ません、洋画だけです、なんて言われましたがね。確かに通俗なメロドラマやちゃちな活劇も多かったけれど、林權澤（イムグォンテク）や李長鎬（イジャンホ）監督の作品には、今につながる手法や問題意識の萌芽があって、光っていました。裵昶浩（ペチャンホ）の『鯨狩り』は、落ちこぼれ大学生と失語症の娼婦、インテリ浮浪者の、涙あり笑いありのロードムービーで大ヒット。日本でも上映され、評価されています。

鄭　韓国での生活は私にとっては人生の転機。そんな時期に川村さんに会って喚起（かんき）されたことは多い。なんでこの網走出身の少し太った男は、韓国の映画にも芸能にも関心を寄せるのか。日本人と韓国人の違いもよくわからないが、自分と川村さんとの間にある違いを理解するのも難しい。まあ私のほうがみっともないのは明らかですね。日本人と韓国人のながめ合いをテーマにするようになったのは、韓国になかなか関心が持てなかった男の苦肉の策。

川村　鄭さんは日本と韓国の中間に立って、いや立たされたと言ったほうがいいのかな、だからこそ両側を合わせ鏡のように見ることができる。どちらにも完全にコミットできないことが、逆にアマチュアの自由な精神を担保しています。自伝的作品『在日の耐えられない軽さ』は大変面白く読みました。

鄭　『在日の耐えられない軽さ』を書いたのは、コリアンの書く自叙伝的作品に違和感があったからです。そこで日本統治時代の経験が語られるのは結構だが、その時代の家族史が今流行の加害・被害史観に平仄（ひょうそく）を合わせて語られ過ぎるのはおかしくないか。そんな違和感を動機にして書いたもので、亡くなった家族の歴史と自分との関係とか、越境体験が自分に与えたものを考えた作品です。

川村　コスモポリタンの発想ですね。

鄭　他の在日2世と少し違うところがあるとしたら、一つは母が日本人だったということでしょうね。また、わが家は地元ではかなり孤立していたんですが、アメリカ人宣教師家族が援助の手をさしのべてくれたというのも変わった体験だと思うし、そのホレチェクさんというチェコ系アメリカ人の家族は、3人の肌の色の違う子供を養子としていたというのも、得がたい体験であったと思います。

川村　お父様は作家の鄭然圭（チョンヨンギュ）氏。1922年に朝鮮

人が初めて日本語で書いた小説『さすらひの空』で日本の文壇に鮮烈なデビューを飾られた。

鄭　あまりいい作品ではありませんね。それでも、渡日前に朝鮮語で小説を書いていて、それが総督府に「排日小説」という烙印（らくいん）を押されていたということもあって、最初の単行本が出たときにはずいぶんセンセーショナルに宣伝された。日本人にちやほやされた在日知識人の第一号ではないですか。両親は東京で暮らしていたのですが、１９４４年の春、母の故郷である岩手に疎開し、やがて4年ほどして私も生まれますが、物心ついた頃の生活はまことに惨めで、私は現実逃避の空想ばかりしてました。

川村　お父様は韓国に戻られましたね。

鄭　李承晩（イスンマン）政権が倒れた１９６０年に帰りました。父は１８９９年の生まれですから61歳のときです。子供も連れて帰ろうとしたのですが、われわれは従わなかった。さっきお話ししたアメリカ人宣教師の助けで東北のある地方都市で仕事をしていたアメリカ人宣教師の家にしばらくかくまわれていました。70年代半ばに父を訪ねましたが、豚小屋の横の一間に住んでいて相変わらず原稿を書いてました。

ブームと共に常にあった、日韓の政治的葛藤

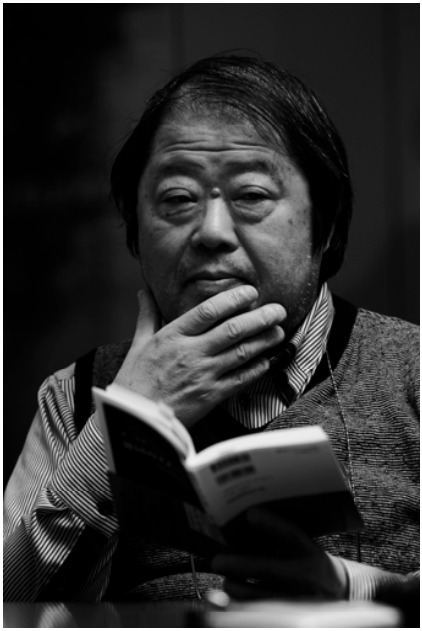
川村　80年代は、韓国ブーム一色だったわけではなく、日韓の政治的な動きもありましたね。鄭さんは著書『韓国のイメージ』の中でユニークな戦後の時代区分をなさっていますが。

鄭　読者のために説明しておきましょうか。日本人の韓国へのながめといっても、ずいぶん変化があります。第1期は１９４５年から日韓基本条約調印の65年までの20年間で無関心と避関心の入り混じったような時代です。日韓の間には国交がなく、この時

代の日本は植民地時代の記憶や体験を、伝承しようとするよりは忘却しようとした時代です。

第2期は65年の国交正常化から韓国ブームの始まる84年までの時期で、韓国の独裁政治に対する否定的関心が高まった時代。無関心の時代から政治的関心の時代に移行したわけです。日本の保守政権が韓国の反共政権との間に協力関係を形成し、その近代化や産業化をサポートするというのがこの時期の日韓関係になりますが、革新勢力は、当然のことながら、それを妨害しようとしました。

そして第1次韓国ブームの始まった84年から98年頃までが第3期で、文化的関心の時代となります。



川村　この時期は一方で、教科書問題や歴史認識の問題が話題になりますね。

鄭　第3期は政治的な韓国論に代わる文化的な韓国論が台頭し、日韓関係も明朗になるかの印象があったのですが、一方では、日韓の歴史道徳的テーマがマスコミで広汎に取り上げられた時期でもあります。日本人の韓国に対する負い目意識が大衆化した時期です。国交正常化以後の日韓関係を、①「逃げ」の姿勢でその場その場をしのいで行こうとする日本と、②そうした日本を逃すまいと襟首をつかんで「要求」し「糾弾」する韓国と形容したのは田中明ですが、この時期にきて、日本はいよいよ襟首をつかまれて、自らの加害者性を承認してしまった。

川村　在日＝強制連行の被害者、というイメージも定着しましたね。

鄭　「強制連行」といったって、日本人の男は戦場に駆り出されていたんですからね。朝鮮人が「官斡旋」だとか「徴用」という形で炭鉱や建設現場に駆り出され、労働させられたのは事実です。しかしそれは戦場に駆り出されることと比べたら、被害者性が高いとはいえないでしょう。にもかかわらず、日

本人の加害者性とコリアンの被害者性が国際的に承認されてしまうというのがこの時代のできごとです。ちなみに、在日に関していえば、一旗揚げるために海を渡ったという人が大部分でしょう。

川村　難しい問題です。

鄭　80年代は在日の社会的権利に大きな進展があった時期でもあります。国民年金、児童手当、公営住宅の入居、住宅金融公庫の融資から国籍条項が撤廃され、生活制度上の差別がなくなりました。地方参政権は議論あるところですが、帰化をして参政権を行使すればいいのだと私は考えます。そもそも多くの在日は、韓国籍を持っているといっても、本国に帰属意識がないではありませんか。

現代に至る韓流ブームをどう読むか

川村　98年、金大中大統領と小渕恵三首相の日韓共同宣言を起点に、現在までを第4期、韓流の時代とするわけですね。この年、映画『8月のクリスマス』が封切られ、2002年にワールドカップ日韓共催、03年が『冬のソナタ』の大ブレイク。第2次韓国ブームの到来です。

鄭　韓流の時代でもっとも印象的なのは、日本の女性が隣国の男性に好意的関心を寄せるという情景で、これはかつては想像もできないことでした。「ヨン様の時代」の到来ですね。

川村　ヨン様のプロトタイプは昔からありますよ。菊池寛と秘書の佐藤碧子、児童文学作家・馬海松の三角関係は有名です。詩人の金素雲、金龍済、林和や、作家の金達寿もモテたといいます。

鄭　現在の韓流ブームに関していえば、一時の熱狂は収まりましたが、韓国の大衆文化は日常的な風景になりましたね。

川村　90年代から韓国の映画や文芸は、大きく変容して実力をつけています。まず文化の解禁政策。金芝河もマルクス主義も日本文化もOKで、検閲がなくなりましたから、自由に作品が生み出せる。

　またアメリカに映像や演劇、文学の勉強に留学する人間も増えました。かつては科学、医学、政治、法律など実学が中心でしたから、それだけ韓国も豊かになったわけです。日本でも大ヒットした99年の『シュリ』、00年の『JSA』は典型ですが、まさにアメリカで身につけた表現手法。非常にダイナミックな画面と複雑なストーリーで観客を魅了します。

南北問題をエンターテインメントにする、という発想そのものがすごい。

文学も以前は『太白山脈』など大河歴史小説が主流でしたが、世代交代が起こり民主化運動の時代に20代、30代を迎えた申京淑、孔枝泳など新しい感性の作家が登場しました。孔は辻仁成とのコラボレーション『愛のあとにくるもの』で、日本でも知られていますね。姜棟元主演『私たちの幸せの時間』で映画化もされました。

鄭　韓国のアートシーンの変革には、韓国系移民の影響もあるんじゃないですか？　65年にアメリカでは移民法が改正された結果、アジアからの移民が増大する。在米コリアンの数は、アメリカ国籍を持つものを含めて210万人ぐらいですか。　かつての移民には国を捨てるという状況があったが、今日の移住者たちはケータイやネットで故国や故郷との絆を維持することができます。移民送出国の政府も自国民の人的資源を活用するために移住者との絆を維持しようとする。アメリカに渡っても故国との絆は切れませんね。

川村　最近、ブエノスアイレスとサンパウロに、韓国系アルゼンチン人と、韓国系ブラジル人の調査に行きました。主に文芸の軌跡をたどる旅でしたが、かなり強固なコミュニティを持っています。コリアンタウンでは若い世代も活躍していて、ネットワークも広い。確かに韓国だけを見ていたら、全体像を見失うと思います。

対照的に、日系移民は高齢化し減少している。こんなに閉じていて、いいのかなと。

鄭　越境とか移民のテーマは大学でも取り上げられることが多いのですが、そんな講義しても、外国に親戚がいる学生が日本にはめったにいない。ソウルのキャンパスなら3〜4割ぐらいはいるでしょう。日本のなかに部外者的な目を持つ人間が少なくなっているのが心配です。戦前は外地という形で異文化に触れていた人が大量にいたことも忘れてはいけない。学生も留学や長期滞在旅行に消極的になりましたね。異文化を通して自分を知ることは、自己認識、世界認識の重要な契機になるはずです。

川村　この前、若い小説家を連れて中国へ行ったんですが、海外は初めてという人間が何人もいるんです。このままでは韓国に押されぎみですね。ただ、韓流ブームが定着する半面、嫌韓論はなくなりません。一方、北朝鮮が逆の意味でブームになっていま

すし。北朝鮮には私なりの解釈がありますので、表層的な叩き方はあやういと感じる。

実は北朝鮮映画のビデオやDVDを蒐集(しゅうしゅう)していましてね、読み解くと興味深いものがあります。

鄭　嫌韓論が出てきたのは、なによりも韓国が強い国になったからでしょうね。もう無視できるような国ではなくなった。否定的ながめというなら、昔は蔑視(べっし)がありましたが、蔑視というのは弱いものに対するながめですね。それが今では敵意を感じるものがいる。これは韓国のプレゼンスが高まったからでしょう。韓国人の反日ナショナリズムに反韓ナショナリズムで呼応する日本人がいるということで、これはある意味自然な成り行きです。

川村　ただし保守派は昔風の帝国主義とか差別意識を払拭しきれていませんから。それに取り込まれると、不毛な議論になる可能性があります。

最近『姜尚中(カンサンジュン)を批判する』という本を書かれましたが、その辺りを意識なさったのですか？

姜尚中と在日の生き方について考える

鄭　彼の自叙伝という『在日』は、在日の犠牲者性の表象を極限にまで高めたような本で、これはけしからんと思ったわけです。在日論というのは大概が犠牲者論ですが、現実にみる在日はあまり犠牲者風ではないでしょう。おかしいわけです。姜尚中がそこで描いた母はえらく犠牲者風ですが、その後に刊行された小説『母―オモニ―』を見ると、なんということはない、在日によくいる肝っ玉母さんが描かれているではありませんか。これを私は「着せ替え人形的」と形容しましたが、要するに、姜尚中という人は必要なら母であれ、在日であれ、仕立て上げることをいとわない人間なんです。だれも批判する人間がいないから私がやっただけのことです。

川村　鄭さんはイヤかもしれないけど、私にはお二人は裏と表に見えます。たぶんどこかで自分の帰属する部分から遊離しているからですよ。特に彼は、帰属するところのないコスモポリタン。だから流行、都合のいいところ、受けるところに自分の足を置けてしまう。鄭さんは反対に受けないところに一生懸命足を下ろそうとするから、はっきり言って嫌われる部分があるんじゃないですか？

鄭　裏と表ですか。私が裏ですね。彼を見てると世渡り上手というか、運動神経の発達した人間ですね。

北京でも平壌でもうまく生きていけるでしょう。

『姜尚中を批判する』に関してですが、姜尚中批判をしただけではなくて、私自身の在日論も展開しています。在日は韓国籍を持っていても外国人意識が希薄でしょう。もう外国人なんかやめてしまって日本国籍をとって、日本社会のフルメンバーとして生きたらいいじゃないですか。孫正義、李忠成、韓昌祐と良きお手本もあるじゃないですか。民族的出自をあきらかにしながら、日本人として生きています。

川村　この4月から、在日韓国人も韓国の国会議員や大統領の選挙権を行使できるそうですね。でも、投票に行く人はほとんどいない気がします。韓国の政治を動かす組織力もあるわけではないから、候補者からの働きかけもないでしょうし。

鄭　80年以降に渡日したニューカマーには、韓国の選挙にも関心がある人もいるでしょうが、オールドタイマーの在日には、ハンナラ党と民主統合党の区別もよくわからないんじゃないですか。

グローバル化が進む文化の功罪

川村　韓流ブームの定着はいいのですが、最近気になるのは韓国と日本の文化の均質化です。どちらも薄っぺらなコンビニ文化が席巻している。韓国のどこの街に行っても、同じようなコンビニがあって日本風のおにぎりやおでんを売っています。空港のエクステンションでもデパ地下でも、ラーメンやお寿司が出てくるし、ユニクロも吉野家も、文字がハングルなだけで店舗のスタイルは一緒だし。

鄭　裏通りの市場には異文化が残ってるでしょう。

川村　2、3日前にソウルの鍾路を歩いたんですが、路地の小さなお店が再開発で全部なくなっていました。釜山でも我々が住んでいた東大新洞の市場がほんの小さく残っているだけで、あとは消えている。

鄭　喧騒の中でアジュモニ（おばさん）と触れ合ったり、逆に意思疎通ができなくて葛藤を経験したりするあたりが、異文化体験の醍醐味なんですがね。

川村　感受性そのものが癒着してきたのではないでしょうか。少女時代やKARA、東方神起といったKポップが日本の若い世代に人気なのは、韓流の異文化としてではなく、同じ土俵だから受けているのかもしれません。

鄭　アイドルは同じようにキレイですからね。うちの甥っこが軍隊の休暇でソウルの家に泊まっていっ

たんですが、最後の日に冷蔵庫にある家内のコラーゲンパックを取り出してね、トイレにこもっていたと思ったら、ピカピカの肌になって出てくるんだね。韓国の男の草食化も急速に進んでいますね。

川村　文化のグローバル化は東アジア全体に言えます。韓流人気は台湾、中国、タイにもあるし、村上春樹、村上龍、吉田修一、角田光代、江國香織。翻訳が同じような装丁で並んでいます。

鄭　韓国でも村上春樹は人気ですか？

川村　全体の部数では、かつての三浦綾子『氷点』や山岡荘八『大望（徳川家康）』を越えるでしょう。

新しいカルチャーが、若い世代の共通言語として膨らみ、相互理解に役立てばよいのですが。

鄭　とはいえ、文化的な差異というか垣根は残ってくれたほうがいい。良い垣根は良い隣人をつくる。韓国にとっても、日本にとっても、隣国は刺激的であってくれたほうがいい。

川村　3・11の東日本大震災のすぐあとソウルにいたのですが、どこのホテルにも「がんばれ日本！」の横断幕と義援金箱があり、こんなに親日的だったかなと思いました。まだまだ日韓から目が離せません。

鄭　そうですね。また10年後に対談をしましょう。